

「女性学」との17年

石川 康 宏

私は阪神・淡路大震災直後の1995年4月に神戸女学院大学に赴任し、ここで初めて「女性学」と出会いました。その後今日までの私と「女性学」のおつきあいを、以下に簡単に紹介してみたいと思います。

院生として私が書いた最後の論文は「日米貿易摩擦とアメリカ鉄鋼保護貿易政策の展開」で、当時の私の研究上のキーワードは「日米関係／鉄鋼産業／経済政策」などでした。その私が女子学生に「経済学」を語る中で最初にぶつかったのは「経済社会における女性の地位」という問題です。企業社会における女性の地位や専業主婦という生き方——これらはそれ以前の私の視野には含まれなかった問題でした。

2000年になって本研究所の『女性学評論』に「癒されるべき企業社会の『病』・女性差別」を書きますが、これは私が「ジェンダー＝社会的な性差」を意識して書いた最初の——非常に中途半端な——論文でした。

これをきっかけに同年4月に「神戸女学院大学ジェンダー研究会」を呼びかけます。呼びかけに応じてくれたのは、文学者、心理学者、歴史学者など30～40代の女性たちで、「フェミニズム」の問題意識や到達について、私はたくさんのお話を教えてもらいました。

2003年2月には、この研究会で『はじめのジェンダー・スタディーズ』（北大路書房）を出版します。私の担当は「主婦とはどういう存在なのか」（第5章）と「仕事にまつわるジェンダー・ギャップ」（第7章）他でした。主婦論については家族社会学の研究に多くを学び、この頃から労資関係とジェンダー視角の統一をつうじた資本主義理解の深化を意識するようになります。2003年5月には論文「マルクス主義とフェミニズム」を発表しますが、これはマルクスの資本主義社会論と「フェミニズム」の問題提起の関係を、私なりにはじめて正面から論じたものでした。これら3つの書き物は、2004年に出版した『現代を探求する経済学』（新日本出版社）に収録してあります。

2004年に日本軍「慰安婦」問題と出会い、以後、私はゼミの学生たちと毎年韓国を訪れるようになります。これについては、「ジェンダー研究の延長ですか」と問われることもありますが、「慰安婦」問題には女性を性の道具とする男性支配の側面の他、民族蔑視、国家犯罪、「死」を前提とした日本軍の異常な構造などが絡まっており、ジェンダー視角だけではとらえ切れませ

ん。この問題についてのゼミの最新刊は『「ナナムの家」に暮らし、学んで』（日本機関紙出版センター、2012年）となっています。

つづいて論文『「資本論」の中のジェンダー分析——『マルクス主義フェミニズム』との関わりで』を2005年12月に発表しました。主にA・



石川康宏 教授

クーン／A・ウォルフ編『マルクス主義フェミニズムの挑戦〔第二版〕』（勁草書房）を検討したものです。英米におけるマルクス主義フェミニズムの「古典」と評されたものですが、マルクスへの理解には少なくない弱点が含まれました。そのほとんどは、スターリン流の影響を色濃く受けたマルクス理解を、マルクスその人の思想と同一視したことによる弱点でした。

2007年3月には論文「長時間労働・女性差別とマルクスのジェンダー分析」を発表します。これはマルクスの『資本論』に含まれたジェンダー視角に注目して、「男は仕事と残業、女は家庭とパート」という戦後日本での労働力配置の社会的性差を検討したものです。マルクスには日々の労働力の生産と世代的な再生産を担う労働者家庭の「公」的機能への注目や、ダブルインカム・トリプルインカムの世帯を労資関係の中にとらえる基礎的な視角がありました。高度成長期の財界や政府による「家族」政策が、男性への長時間労働と女性への家庭責任の強要を表裏一体としていた事実の確認は、ジェンダー視角にもとづく資本主義経済の原理的理解を豊富化させるものとなりました。

これらの研究の副産物に、論文「人口変動とマルクスの資本主義分析」があります。2006年9月に発表したもので、歴史人口学の成果に多くを学んだのですが、人口変動を社会システムの段階的發展と結ぶ点や多産多死から少産少死への「人口転換」のとらえ方に、マルクスの歴史論や資本主義分析との深い重なりがあることに驚かされました。2009年には、卒業生へのインタビューを柱にした『輝いてはたらいきたいアナタへ』（冬弓舎）もゼミで出版しています。

本学での私の人生も残すところ10年となりました。その間に「女性学」は、私に新たに何を考えさせてくれるのでしょうか。それを楽しみひとつとして、にぎやかに「余生」をすごしていきたいと思ひます。

（文学部教授：経済学）